

赤十字

Japanese Red Cross Society NEWS

NEWS

5

May 2026
#1032

新型コロナが広がる クルーズ船で



船内で活動した日赤職員

142人

(派遣救護班 67人・DMAT派遣 75人)

赤十字NEWS
オンライン版はコチラ



特集 ▶ P.2

未知のウイルスに挑んだ、赤十字人たち

日本赤十字社の使命

苦しんでいる人を
救いたいという思いを結集し、
いかなる状況下でも、
人間のいのちと健康、
尊厳を守ります。

船内の救護活動を支えた 赤十字マインドとは？

人道

Humanity

「人間の苦痛を予防・軽減することを最優先とする」まさに船内の活動は、苦しんでいる人の苦痛を和らげることを最優先とする人道支援でした

公平

Impartiality

56カ国の国籍、人種、社会的立場(大型クルーズ船の客層)などによる差別や区別をせず、支援をより必要とする人を優先して援助しました

中立

Neutrality

感染への恐れから多くの対立や分断が生じた中で、赤十字はそれらの対立や議論に立ち入らず、「いま救うべき人に支援を届ける」ことに専念しました

CONTENTS

TOPICS

- 47都道府県のご当地ハートラちゃんが登場！
あなたのお気に入りには、どの子？ …… P.4
- 赤十字講習100年 家庭から地域へ
WEB&赤十字情報プラザで「企画展」開催中 …… P.5

連載

- 海外派遣の現場から ルワンダ共和国編 …… P.4
- けんけつのいま …… P.5

AREA NEWS

- [全国] 赤十字パビリオンの感動を再び！
大阪・関西万博での上映映像を公開
- [神奈川] 青少年赤十字メンバーが
米国赤十字社ユースクラブと
国際交流会で親睦を深める/他 …… P.6

WORLD NEWS

- 中東で広がる人道危機
戦闘の激化に奪われる日常。赤十字がつなぐ命。 …… P.8

Present!

パナソニック
目もとエステ
EH-SW68
5名様



詳しくはP.7をCheck! ▶

赤十字運動月間 想いの力を、救うかに。

未知のウイルスに挑んだ、赤十字人たち



2020年初頭、横浜港に停泊していた大型クルーズ船で発生した新型コロナウイルスの集団感染。未知の感染症として社会に恐怖と分断が広がっていた「あのとき」、赤十字の医療救護班が船内で隔離された乗客・乗員のケアと診療にあたっていました。あれから6年、当時は報道されなかった、知られざる「赤十字の救護活動」をレポートします。

乗船者の国籍：**56カ国**
乗客・乗員：**3711人**

日赤救護班の船内活動



日本赤十字社医療センター 国際医療救護部
とまべち のりこ
苦米地 則子 調整監



クルーズ船内の診療所での園分師長

閉ざされた船内で 見えないウイルスと闘った救護活動

「横浜港に停泊している大型クルーズ船に救護班の統括調整員として入ってこないか」。日赤本社からその打診があったのは、病院での日勤中でした。私は日赤医療センターの看護部長ですが、赤十字の国際救援の経験が買われ、指名を受けました。その打診後すぐに、感染症科の医師に呼ばれ、感染管理室でPPE*（個人用防護具）の着脱練習。海外でさまざまな現場を経験してきましたが、ここまで厳重な感染予防の準備は初めてでした。そのまま帰宅する間もなく横浜港へ。人種のるつぼとも言える船内での活動にプレッシャーは感じなかったものの、**感染ルートも治療法も明らかになっていない未知のウイルスに対しての不安を抱えながら**、現場に入りました。

日赤救護班の主な役割は、船内の診療所「メディカルセンター（以下、MC）」における乗客・乗員の健康管理と、MCに常駐していた医療スタッフの支援。日赤はMC内での対応、DMATは船内全体での乗客の対応、と役割が分かれていました。私は朝夕の2回、統括調整員としてDMAT、自衛隊などの救護部隊が集まって行われるミーティングに参加し、日赤



福島赤十字病院
こくぶん はなこ
國分 花子 看護師長

自分自身の不安と恐怖を抑えて 患者に寄り添った船内診療

航行中から乗客の診療を担っていた船内MCスタッフは、私たち日赤救護班の支援が入るまで不眠不休で疲れきっていました。彼らを休ませるため、私たちは夜間の診療や調剤を担当。当初は熱や咳症状のない方を診る前提でしたが、船内で感染が広がるにつれ、陽性の可能性もある方への対応も行うことに。**自分も感染するかもしれないという不安もある中、船内に閉じ込められて不安という立ちを募らせている皆さんの言葉に耳を傾ける**ことに徹しました。

*医療や介護現場において、感染源や危険から身を守るための装備（手袋、マスク、ガウン、ゴーグルなど）の総称

01

DMATとしての船内活動



日本赤十字社 医療事業推進本部
わたなべ よういち
渡部 洋一 本部長

3.11の経験が後押しした出動 船内では、赤十字の強みを実感

私は当時、福島赤十字病院で院長を務めていました。国は船内の医療活動をDMATと日赤に依頼しましたが、応じた医療機関はごくわずか。しかし、福島県を通じて当院にDMATとしての出動の打診があった時、私は迷わず決断しました。その背景には、東日本大震災での経験があります。原発事故に見舞われた福島県は、救護班の確保が極めて困難でした。福島県への組織的な救護班派遣体制が確立されなかったため、福島県支部が全国の支部に救護班の派遣を依頼しても円滑な派遣は実現しませんでした。しかし、たまたま福島県庁を訪れた他県の日赤救護班が、避難区域から逃れてきた被災者の受け入れを手伝ってくれたのです。その際、あ

船内でのロジスティクス

「恐怖の対象だった「あの中」で、支援できた喜び

私は船内で医師・看護師らが診療に集中できるよう、飛び交う情報の整理と記録、関係者への共有・伝達などを行いました。多いときは1日99人の陽性が判明し、陽性者を船から病院に搬送しなければなりませんでしたが、国籍（言語）、船に残る家族、容体（長距離搬送に耐えられるか）など、それぞれの事情もあり、船内の医療対策本部は対応に追われました。そんな中、船内の感染対応の状況が誤った形で伝えられ、メディアによる報道の過熱も相まって、広く拡散される事態に。それによって交替で来る予定だった医療チームが次々とキャンセルとなり、過酷な環境で苦悶しながらも最善を尽くしていた船内の医療従事者たちに追い打ちをかけました。今振り返ると、あの新型コロナの危機の中で、大型クルーズ船の活動に参加できてよかった、と心から思います。原発事故の影響で、**県外から救護班の派遣が途絶えるという経験をした「福島」の私たちが、「助けに行く側」としてクルーズ船に乗り込んだ**。そのことで、なにか報われた気持ちになるのです。

クルーズ船で救護活動をした日赤の病院・職員数

①救護班の派遣(赤線)

厚生労働省からの依頼に基づき船内に救護班などを派遣
派遣期間：令和2年2月10日(月)～令和2年2月26日(水)まで

派遣医療施設	14施設
派遣要員数	67人

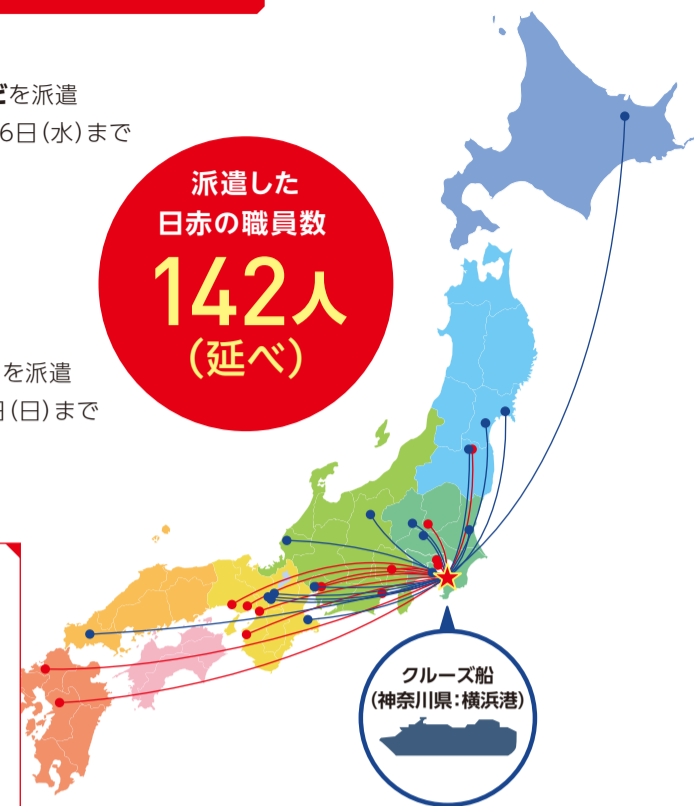
②日本DMATとしての派遣(青線)

厚生労働省DMAT事務局からの依頼に基づき、**日赤からDMAT隊員(医師、看護師、業務調整員)を派遣**
派遣期間：令和2年2月6日(木)～令和2年3月1日(日)まで

派遣医療施設	16施設
派遣要員数	75人

DMATとは

地震や事故などの大規模災害時、急性期(おおむね48時間以内)に現場に駆けつけ、救急・災害医療を行う専門的な研修を受けた医療チーム。2020年の大型クルーズ船での経験を含む新型コロナウイルス対応を経て、DMATは感染症危機においても医療支援を担うことが明確化された。



派遣した日赤の職員数
142人(延べ)

クルーズ船(神奈川県・横浜港)

る班員が「原発事故でも助け合うのが赤十字です」と言ってくれた言葉に、胸が熱くなりました。その経験が、「今後、困難な災害が起こったら自分たちが行く」という使命感に変わりました。**大型クルーズ船は被災地で、乗客は被災者**と捉え、1人でも多くの命を救うために、**被災者である乗客・乗員の救援に全力を尽くそうと**私たちは決意しました。

覚悟を決めて乗り込んだ船内。しかし、**狭い閉鎖空間である船の中は、汚染区域と清潔区域を分けることが難しく、隊員の感染を危惧せずにはいられませんでした**。私たちは重症患者の医療機関への搬送や、軽症陽性者の速やかな下船対応を担い、咳こむ乗客に付き添って客室から遠い出口まで誘導することも。何日も病室に隔離されている乗客たちからは、「いつ外へ出られるのか」「自宅近くの病院へ行きたい」といった切実な訴えもあり、説明と説得には心を砕きました。**このような状況の中で私に力くれたのは、同じ使命感で活動できる赤十字の仲間**の存在です。初対面でも、赤十字マークを付けていれば即座に協力し合える。その結果が、船内でも大きな力を発揮していたと感じます。



クルーズ船内で活動する渡部院長(当時)

03



①クルーズ船内の吹き抜けのある中央ロビーでミーティングを行う日赤救護班
②DMATとして症状のある患者のいる客室へ向かう日赤救護班の後ろ姿

日赤福島県支部 事業推進課
くぼ よしひろ
久保 芳宏 課長



クルーズ船内の医療対策本部で、データ整理をする久保さん

02

04

T O P I C S

1
TOPICS

47都道府県のご当地ハートラちゃんが登場! あなたのお気に入り、どの子?



日赤の公式キャラクター「ハートラちゃん」に、ご当地版が登場! 全国47都道府県の特徴を取り入れたデザインで、地域の魅力を表現した新しいハートラちゃんが誕生します。

この取り組みは、日本赤十字社創立150周年を見据え、各地の活動をより身近に感じてもらうために進められてきたものです。日赤の各支部や施設の職員がアイデアを出し合い、特産品や風景、文化をモチーフにしながら制作されました。

完成したハートラちゃんは、イベントや広報の場に登場するほか、日赤WEBサイトなどでも公開予定。全国それぞれの個性が集まり、見るだけで元気になるハートラワールドが広がっていきます。

今回はその中から3つを先行して紹介。シルエットをヒントに、どのご当地ハートラちゃんか想像してみてください。答えは全47種類のご当地ハートラちゃんと共に、5月11日の「ご当地キャラの日」に日赤WEBサイトで公開。お楽しみに!

ご当地ハートラちゃん シルエットクイズ

こちらのハートラちゃんのご当地はどこ?



ヒント
ピーナッツの生産量
日本一の県です。



ヒント
七夕で有名な県です。



ヒント
しらす丼が有名な県です。



シルエットクイズの答えと47のご当地ハートラちゃんはWEBでチェック! 5/11(月)情報解禁!

Vol.6 海外派遣の現場から

ルワンダ共和国編

世界の現場で出会った人々とのふれあい、その土地でしか感じられない息づかい。赤十字の国際要員たちが見た、笑顔や驚き、そして心に残る瞬間をお届けします。

合言葉でつながる赤十字ボランティア

きのえつこ
リポーター 記野 江津子さん



ボランティアが実施する「栄養教室」を見学(左側が記野さん)

私は、普段、国際色の少ない総務系の仕事をしていますが、日赤がルワンダ赤十字社と共に実施している「モデルビレッジ」事業の調査のため、現地を訪問する機会を得ました。ルワンダ共和国ギザガラ郡の5つの村では、各村10人の赤十字ボランティアが中心となり、保健(マラリア予防や栄養指導)、衛生(トイレや給水設備づくり)、共助(共同貯金)などの支援活動を行っています。

村に到着すると、この地区の赤十字ボランティアが全員集まり、パワフルなダンスで迎えてくれました。ルワンダでは、「Croix Rouge! (赤十字!)」、「Ku isi hose! (みんな一つ!)」という合言葉のもと、活動が行われています。日本の赤十字奉仕団が信条唱和をもとに活動しているのと同様の位置づけです。

現地でお話を聞いたうちの一人、赤十字ボランティアのデニーズさんは、「私が孤児になった時に、赤十字が家族を紹介してくれました。その恩返しで、赤十字でボランティアをしています。活動する時は赤十字の人道の考え方を大切にしています」と話します。給水設備の管理者であるクラウディーンさんは、「かつては子どもたちが水汲みに往復2時間かけていましたが、赤十字のおかげで水場が近くなり、子どもたちは学校に通えるようになりました」と語ってくれました。

この現地調査を通して感じたことが二つあります。どの村人も私たちを笑顔で迎えてくれ、自宅の家畜

や家庭菜園をうれしそうに案内する。赤十字が普段から村人の気持ちに寄り添ってきたことの表れだな、と。また、困っている方に寄り添う「人道」の気持ちは世界共通であるのだ、と。

日赤の「モデルビレッジ」事業は新たな村を対象にして継続し、赤十字ボランティアの活動も続いていきますが、新しい場所でも、村人自らが行動を起こしてその変化を実感し、これから人道の輪が広がっていくことを願っています。



共同貯金の帳簿をつける村人たち

2 TOPICS

赤十字講習100年 家庭から地域へ

WEB & 赤十字情報プラザで「企画展」開催中

今年、日赤の講習事業が、100周年を迎えます。それを記念して、**赤十字情報プラザ(日赤本社1階)**と**赤十字WEBミュージアム**で**企画展を開催中**。当時の教本や貴重な写真資料を通して、その歩みをたどります。(会期:2026年4月1日~2027年3月25日)

1926(大正15)年末、救急法や家庭看護法を主要な科目とする「衛生講習会」が誕生。日赤が持つ応急手当や看護のノウハウを分かりやすく一般市民に伝える講習事業を開始しました。

1934(昭和9)年、衛生講習会から「救急法講習」が分離。第二次世界大戦中に一時中断するも、1946(昭和21)年、衛生講習は「家庭看護講習」として再スタート。戦後の衛生環境が劣悪であった時代に、**家庭での看護**

知識と技術を伝える講習は、暮らしに根ざした学びとして広がっていきます。

1951(昭和26)年、講習は二部制になります。「第一部」は、家庭での看護と感染症予防などを学ぶ内容。「第二部」は、妊娠・分娩、乳幼児のケアを学ぶものです。そこには、乳児死亡率がきわめて高かった当時、**赤ちゃんの命を守るために、家庭でできることを広めたい**という思いがありました。1972(昭和47)年、来るべき高齢化社会に向けて、老人看護の「第三部」が新設されます。超高齢社会*となった現在、「家庭看護講習」は、家庭から“地域での支え合い”のための「健康生活支援講習」へと発展。誰もが健やかに生きられる社会を目指して、全国各地で実施されています。



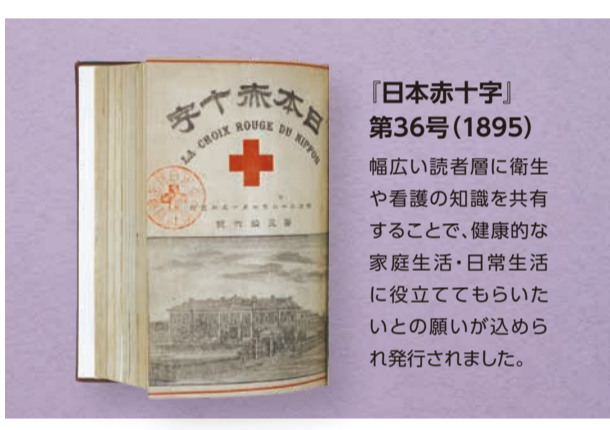
赤ちゃんの入浴法をまなぶ 赤十字家庭看護法の講習風景(1950年代)

*総人口の21%以上が65歳以上となった社会を指す(内閣府「高齢社会白書」)



展示品を一部紹介

「家庭看護法 全」より



『日本赤十字』第36号(1895)

幅広い読者層に衛生や看護の知識を共有することで、健康的な家庭生活・日常生活に役立ててもらいたいとの願いが込められ発行されました。

前企画展「99年目の救急法」に続き、今回は「家庭看護の発展」がテーマ

「赤十字講習100年 家庭から地域へ」WEB特別企画、公開中!



けんけつのいま

支える命、つなぐ未来。 vol.14

献血に関するさまざまな取り組みを紹介します。



Promoting Blood Donation

実は裏側が熱い、図書館での啓発イベント

今年1月~2月、山形県立図書館を会場に開催された、献血の啓発イベント。献血ルームSAKURAMBO(さくらんぼ)の職員と高校生ボランティア、関係者が力を合わせて実施するこの企画は今年で3年目となりました。期間中、特に力を入れているのは、親子で参加できる体験コーナー。同献血ルームの職員、保科美有さんは、その取り組みをこう振り返ります。

「まずは、12月に高校生ボランティアと準備開始です。ぬりえコーナー担当の生徒は参加者との会話で説明できるように献血パンフレットの内容を覚え、**大きな体で愛嬌たっぷりに動く「けんけつちゃん」担当は、かわいらしく見える動きやしぐさを研究。お子さんと写真撮影する際に、かわいいポーズができるように、入念に練習しました。**また、イベント当日に参加できない生徒も、来場者へ配るしおり制作で協力しました」

イベントの裏側を支えるメンバーは次の通りです。日赤職員5人(献血セミナー担当2人、セミナーでオンライン中継する血液センターに2人、けんけつちゃんお世話

係1人)、高校生ボランティア9人、そこに血液の遠心分離機を扱う医療機器メーカーの方も加わります。

さあ開演。小学生も楽しめる献血セミナーの後は、遠心分離の試演です。血液の代わりに青汁とトマトジュースを機械の中で回転させ、成分が分かれていく様子から、血液製剤を造る工程の一部を観察。**子どもたちが食い入るように見る傍らで、付き添いの保護者も思わずのぞき込みます。**小さな子向けのぬりえコーナーも、大切な啓発の場です。「けんけつちゃん」に手を振る子どもたち、そのそばで対応する高校生たち。準備してきた役割が、それぞれの場面で生かされていました。

この高校生の協力、始まりは「何か手伝えませんか」と、生徒自ら献血ルームへ相談に来たのがきっかけ。彼女たちが青少年赤十字のメンバーであることは後から判明しました。**今年3月、卒業式の後に参加生徒たちが「自分もなにか社会の役に立てたことが、うれしかった」と話していたそうです。**図書館イベントも3年の節目を越え、新しい代に、引き継がれます。



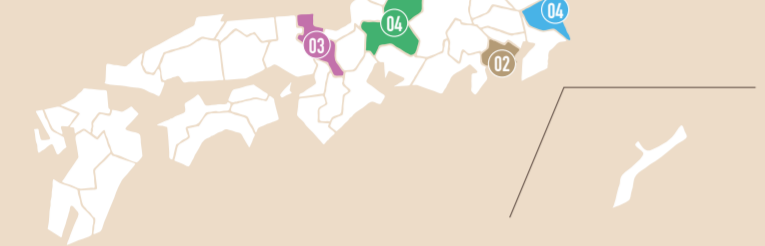
図書館の一角に設けられた展示スペース。スタッフが資料やパネルを運び込み、準備を進めます



遠心分離機の体験に集まる子どもたち。変化していく様子を、親子でのぞき込むように見つめていました

Area News

エリアニュース



全国各地、あなたの生活のすぐそばで日本赤十字社の活動は行われています。



赤十字パビリオンの感動を再び！ 大阪・関西万博での上映映像を公開



昨年10月に幕を閉じた大阪・関西万博。赤十字パビリオン(国際赤十字・赤新月運動館)には、184日間で31万人超が来場しました。同館の魅力は、人道危機の現状を知り、「自分に何ができるか」を深く考えるきっかけとなる3つのゾーンを約30

分かけて体験するもの。中でも、没入型ドームシアターのゾーン2は、上映中に涙する方が続出。世界中の紛争や災害の厳しい現実を、体験者のリアルな証言と共に伝える約10分の映像が反響を呼び、行列が途絶えませんでした。今回、その映像を期間限定でYouTubeに公開。感動のヒューマンストーリーを、ぜひこの機会にご覧ください。



過去の災害で明らかになった食の課題を踏まえ、 「炊き出し」訓練や、非常食の新メニュー作り



日赤茨城県支部では、高齢者や障害のある方などの災害時要配慮者向けの炊き出しレシピを常盤大学健康栄養学科と共同開発しています。2月28日にレシピの体験会とミニ防災セミナーをUR都市機構との共催で実施。親子連れや地元の子ども食堂ボランティアなど一般参加者20人と常盤大学生8人が、新開発レシピの「カレー混ぜご飯」を一緒に調理・試食し、大好評でした。山形県支部・高畠町赤十字奉仕団は、3月8日にボランティア基礎研修会を実施。28人の団員が参加し、災害への備えを学び

ました。また、日頃から耐熱性ポリエチレン袋を使った非常食作り力を入れていることもあり、炊き出し訓練では茶碗蒸しや蒸し鶏のサラダなど新メニューにも挑戦。参加者からは、「とても学びのある研修だった。新メニューもおいしく作ることができて良かった」といった感想が聞かれました。岐阜県支部・下呂市金山赤十字奉仕団は、下呂市萩原南中学校3年生有志と共に、炊き出し訓練を行いました。今回は、炊飯袋(耐熱性ポリエチレン製)でカレーピラフ作り挑戦。初めて炊飯袋を使う生徒も多く「本当に袋でお米が炊けた!」「ふっくらしておいしい!」と驚きの声。中学生らは、奉仕団員の説明に真剣に耳を傾け、協力して作業し、技術だけでなく地域の一員として役に立ちたいという思いが芽生える機会となりました。



青少年赤十字メンバーが 米国赤十字社ユースクラブと 国際交流会で親睦を深める



日赤神奈川県支部では、1月24日に米海軍横須賀基地にて、「国際理解・親善」をテーマにした青少年赤十字(JRC)国際交流プログラムを実施しました。県内15校から18人の高校生JRCメンバーが参加し、午前中は基地内をツアー。基地内フードコートで米国ユースメンバーと共にランチを楽しんだ後、午後は国際人道法をゲーム形式で学ぶ教育プログラム「レイドクロス」などのワークショップを体験しました。参加者たちは、一日を通して互いの文化への理解を深め、交流を温める機会となりました。日本のメンバーからは「英語が話せなくても楽しく、とてもいい経験になった」「戦争の報道を見るたびに、国際人道法が遵守されているのだろうか?と考えるようになった」などの声が寄せられました。



積み重ねた研さんの成果 赤十字救急法指導員に 人命救助の感謝状



日赤京都府支部の赤十字救急法指導員・不破喜昭さんが、日赤の清家篤社長より人命救助表彰を授与されました。不破さんは、昨年11月、勤務先の京都府立山城総合運動公園(太陽が丘)において、心肺停止状態となった方に対し迅速かつ確かな救命処置を行い、尊い命を救いました。この施設では、不破指導員が中心となり定期的に赤十字救急法講習を開催、施設職員が多数受講しています。今回も、受講経験者たちが連携して救命活動を行いました。表彰を受けて不破さんは、「協力者も応急手当講習を受講していたことで、胸骨圧迫が速やかに開始できたことが救命に大きく寄りました。職員としてAEDの位置や救急車両の進入経路などを把握していたため、各人が“あうんの呼吸”で行動できたのも良かったです。多くの人に救急法を普及する意義を実感しました」と語りました。

「看護の歴史を語る上で日赤の貴重な記録は宝です」 NHK『風、薫る』原案作者・田中ひかるさんご来社

NHKの連続テレビ小説『風、薫る』が3月30日からスタートしました。明治時代に近代的な看護を日本で初めて実践し、看護師という職業の礎を築いた大関和と鈴木雅。実在した二人をモチーフにした物語は、作家・田中ひかるさんの著書『明治のナイチンゲール 大関和物語』が原案となっています。「看護の歴史を紐解く上で、日赤は外せない存在だった」と語る田中さんが、4月6日、赤十字情報プラザ(日赤本社1階)を訪問。

開催中の企画展「赤十字講習100年 家庭から地域へ」を見学しました。「物語の中でも、登場人物の会話の中でさりげなく赤十字に触れ、看護史における赤十字の存在の大きさを随所で伝えていきます。私はこの本を執筆する前から、「日赤は最後のとりで」というイメージがありました。母が特殊な血液型だったので、出産の際に万全を期して日赤の病院を選び、私はそこで生まれたのです。今回改めて、赤十字の貴



重な史料を見せていただき、看護師に限らず、血液事業や福祉など、赤十字に関わるすべての人々への感謝の思いが募りました」と、田中さん。なお、この企画展の詳細は本紙P.5でご紹介しています。

5月は「赤十字運動月間」

想いの力を、救う力に。



毎年5月は、赤十字の理念や活動を広く知っていただき、活動に参加する方の輪を広げるための「赤十字運動月間」です。今年度は、「想いの力を、救う力に。」というメッセージを掲げ、赤十字の活動を支える一人一人の思いに光を当てます。赤十字の職員・ボランティアだけでなく、多くの人の心の中にある「誰かを救いたい」「誰かの役に立ちたい」という思い。そうした思いが行動となり、誰かを支える力になっていく。このキャッチコピーには、そんなメッセージがこめられています。来年、創立150周年を迎える日本赤十字社。今回の赤十字運動月間ポスターには、日赤アンバサ

ダーの上白石萌音さんが登場し、これまで積み重ねてきた信頼とともに、次の時代へ向かって前進していく赤十字の姿が、躍動感をもって表現されています。赤十字活動への参加方法は、赤十字奉仕団や個人ボランティア、各種の講習・セミナー受講、青少年赤十字、献血、「会員」としての支援、活動資金の寄付など、さまざまです。詳しくはお住まいの地域の日赤支部にお問い合わせください。皆さまのご参加をお待ちしています。



PRESENT!!

“日赤トリビアクイズ”に答えてプレゼントを当てよう!

Quiz

Q. 大阪・関西万博の赤十字パビリオン映像の中で、繰り返し描かれるテーマとして最も近いものはどれでしょうか?

A. 医療技術の進化
I. 人々に寄り添う支援の様子
U. 献血現場での職員の奮闘

ヒントは右の二次元コードから▶▶▶

プレゼント

パナソニック 目もとエステ EH-SW68

一日の終わり、目もとに温かなご褒美を

温かいスチームが目もとをやさしく包み込み、うるおいを与えながら心地よい使用感をもたらします。選べる温度やコースで、その日の体調に合わせたケアが可能。仕事やスマホで酷使した目もとに、短時間でモリフレッシュできるひとときを。男女問わず使える一台です。

5名様に当たる!

サイズ:高さ6.3×幅14.1×奥行11cm、充電式、1回の充電で約2回(1回約12分)使用可能、3段階の温度設定(高:約42℃、中:約40℃、低:約38℃)、色はゴールド調

赤十字NEWSオンライン版はコチラ▶

赤十字NEWSはWEBでも閲覧できます。ぜひアクセスしてください!

プレゼント希望者は右の二次元コードからご応募ください。

応募締め切り: 2026年5月29日(金)

※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

中東で広がる人道危機

戦闘の激化に奪われる日常。赤十字がつなぐ命。



不安を抱える避難中の女性に寄り添うイラン赤新月社のボランティア ©IRCS

何が起こったの？

がれきの中で続くイラン赤新月社の懸命な救助活動



©IRCS

- ✓ 2026年2月28日以降、中東地域で戦闘が拡大・激化
- ✓ 住宅や医療施設、学校、水や電気といった日常生活に欠かせないインフラにも甚大な被害が。人々の暮らしと安全が大きく脅かされている。
- ✓ 守られるべき民間人や赤十字・赤新月社スタッフ、ボランティアなどの人道支援従事者の死傷者も増加。数百万人が住まいを追われている。

その時、赤十字は…

「今、助けが必要な人」に届くように。危機が深まるなかでも、避難を余儀なくされた人々や負傷者にとって「水」「医療」「心の支え」は生きていくうえで欠かせないものです。各国の赤十字・赤新月社は、最前線で、命を守る活動を続けています。

赤十字の取り組み



人々の暮らしと心の平穏を揺るがす危機に夜を徹して救援活動続ける各国の赤十字

2月末にイラン、イスラエル、レバノンをはじめとする中東地域で戦闘が激化してから約2カ月。民間インフラも各地で被害を受け、深刻な人道危機が生じています。影響を受ける人と地域は拡大の一途をたどっており、各国赤十字・赤新月社は、緊急対応と対策を強化しています。

イラン赤新月社は、全国31州で529の支部から編成された2100チーム、約10万人の緊急対応要員を動員し、救急医療、救援物資の配布、捜索・救助などを各地で展開しています。同社のホットラインには心理的な苦痛を訴える相談が相次いでおり、人々の心に寄り添う心理社会的支援(こころのケア)も、不可欠な活動の一つとなっています。

イスラエルでもミサイル攻撃による死傷者が出ており、イスラエルの赤十字社であるダビデの赤盾社は24時間体制で各地からの要請に応じて救急車と救急救命士を出勤させ、救急医療体制を継続しています。

レバノン赤十字社は、同国内最大の緊急医療サービス提供者として、救急車による搬送をはじめ、血液事業、巡回診療チームによる医療支援、避難所での支援物資の配布など、人々の命と健康を守る活動を最前線で続けています。また、わずか1カ月で100万人を超える人々が国内避難民になるなど、周辺国でも情勢悪化を受けた人口移動への警戒が強まっています。

国際赤十字・赤新月社連盟は、イラン赤新月社の要請を受けて、「イラン複合危機」に対する緊急救援アピールを发出。これにより、約4000万スイスフラン(約81億円)規模の支援を通じて、約500万人を対象に16カ月間の支援を計画しています。**日赤も、このアピールに資金援助を行う他、海外救援金の受け付けを開始して支援を続けています。**



要請に応じて現場に出勤するイスラエル・ダビデの赤盾社 ©MDA



救命活動を行うレバノン赤十字社 ©LRC



空爆の影響で避難を余儀なくされた家族が身を寄せる緊急避難所(イランの西アゼルバイジャン州)。イラン赤新月社のスタッフとボランティアが訪問し、被害にあった方々に「こころのケア」を実施している ©IRCS

VOICE 国際赤十字による共同声明 紛争地で続く人道支援要員殺害への強い憤り

現 在、中東各地では国際人道法*が尊重されず、支援の“命綱”が危険にさらされる状況が続いています。命を救うために活動する人道支援要員や医療要員、また病院や学校、住宅などの民間施設はいかなる場合でも攻撃から確実に保護されなければなりません。国家およびすべての紛争当事者が国際人道法を遵守し、「直ちに具体的かつ実効的な措置」を講じるべきであると強く訴えます。



国際赤十字・赤新月社連盟 ケイト・フォーブス会長



赤十字国際委員会 ミリアナ・スポリアリッチ総裁

* 国際人道法とは？

戦争や武力紛争のなかでも、負傷兵や民間人の命と尊厳を守るためのルールの総称。赤十字・赤新月マークはそもそも「保護の標章」として誕生し、これらを標榜する人や施設は、攻撃の対象としてはならないと定められている。

いまでも続く支援 離れた場所からでも、命をつなぐ行動に参加できます

この状況を受け、日赤は2026年3月16日から「イラン及び周辺国人道危機救援金」の受け付けを開始しています。お寄せいただいた救援金は、日赤、国際赤十字・赤新月社連盟、赤十字国際委員会および各国赤十字・赤新月社が、中立・公平・独立の立場を堅持しながら行う、イランおよび紛争の影響を受ける周辺国、その他の地域における被災者への救援・復興支援活動などに充てられます。皆さまの温かいご支援をよろしくお願いいたします。

こちらからご寄付いただけます▶

